

実施方針

義農公園の再整備に向けて大切に考えていること

松前町の地域文化と課題、そして義農公園再整備の意義

松前町は、歴史的な松前城下町としての伝統、義農作兵衛や瀧姫伝説に根ざした地域文化、そして松前港にまつわる風俗・民族の深い継承があります。これらの文化資源は、地域の風土や歴史の真髄を次世代へ伝えるために、義農祭や松前港祭り、松前秋祭りといった行事を通じて継続的に受け継がれています。

一方で、近年の新市街地の発展に伴う都市構造の変化により、既存の市街地（松前港や義農神社を含む）は高齢化や商店街の衰退、空き家増加といった課題に直面しています。

また、義農神社は、管理者不在のまま老朽化し、地震などの自然災害による倒壊の危険性も高まっています。

一方、政教分離の原則から、この神社の解体や整備は行政側だけで手を付けにくい状況にあります。

義農公園の再整備と義農通り周辺地域の未来像を共に創る

義農公園の再整備にあたっては、地域文化に根ざした価値の継承とともに、多くの人々が居心地良く過ごせる場の創出が不可欠です。さらに、将来予測される災害に対し、確実な備えを行う必要があります。

そのためには、地域の深い歴史・風俗と向き合いながら、地域住民の内発的動機を引き出す環境と、「関わりしろ」を持った運営の拠点づくりが求められます。

以上の課題に対応し、地域の真髄となる価値を次世代へつなぐためには、地域の方々と共に価値創造を推進する拠点が必要です。私たちは、過去と未来のまちの文化を育む場として、住民が主体的に関わり・運営し、未来を担う環境づくりを促進する拠点としての義農公園の役割が非常に重要であると考えています。

義農精神が世代を超えて継承される拠点としての義農公園の役割

「過去と未来のまちの文化を育む場」を具現化するため、ワークショップを通じて町民との「対話・協働」を基盤とします。これにより、町民や役場との信頼関係を築き、義農公園の設計・建設は「共に育む」プロセスとして位置づけられます。

地域主体の参加によって、町民一人ひとりが「プレイヤー」として活躍できる場をつくり、それが義農通り周辺地区全体のまちづくりに連なることを目指します。さらに、顔の見えるまちづくりは災害時の助け合いに繋がり、目に見えない義農精神が世代を超えて継承される拠点となることを目標とします。



実施手順及び工程計画

町民意見を反映しながら、短期間で確実に業務を遂行するスケジュール

共用開始後の運営を見据え、町民の方とともに公園を育てるための事業ロードマップ

令和10年度中の共用開始（予定）を見据え、基本設計段階から運営方法を議論し逆算的に設計を進めることが重要です。また、地域の暮らしのリサーチや広域的なまちづくりの視点を踏まえ、管理候補者や飲食事業者との連携可能性も考慮した事業ロードマップを検討します。

分かりやすいベンチマークの設定による本業務の推進

約4ヶ月という短期間での業務推進にあたっては、早期に町民の意見を丁寧に聞き取り、取りまとめることが非常に重要です。特に、施設構成や建築物の検討においては、発注者と工程上のベンチマークを明確に設定し、スムーズな合意形成を図りながら業務を推進していくプロセスを重視します。

また、事業予算が未決定の状況にあるため、次年度に実施設計を実施し、令和10年度中に共用開始を目指すことを踏まえると、本業務期間中に予算要求の調整も必要となることが予測されます。これらについても発注者と密接に調整を行い、適切なタイミングで概算工事費の算出を進めてまいります。

特定テーマ①「多様な世代が居心地よく過ごせる公園空間の再構築」

多様な世代が居心地よく過ごせる公園

活動が隣接することを許容する寛容性のある空間や境界

様々な世代のニーズを丁寧に掘り起こし、それぞれの活動が隣接していても気にならない、むしろお互いが気持ちよく過ごせるための「舞台背景」となる空間構成を、細部のふるまいレベルで丁寧に設計します。

過去の思い出を新しい義農公園の要素として取り込む

工事前の義農公園の思い出を世代を超えてつなぐことや、義農神社の要素を現代的に解釈し、新たなデザインモチーフとして取り込むことにより、松前町のシビックプライドに貢献します。

利用者主体のビジョンづくり

居心地のよい公園づくりには、「禁止型」ルールを「可能性型」「促す型」のルールに変える運営上の工夫や、利用者主体のビジョンづくりが不可欠です。運営支援も設計と連動させながら進めていきます。

マルシェ広場

車両対応用のコンクリートブロック舗装として、災害時には緊急車両等の乗入れる場所とする。

倉庫・防災倉庫
発災時に利用しやすい位置に防災倉庫を設置。また、催事用の什器をしまう倉庫も併設する。

義農神社

歴史資源への敬意を持ち、親しみのある公園との一体的整備を提案します。



アンケート結果とワークショップ内容を丁寧に反映

私たちは、現在松前町で実施中の「みんなでつくる義農公園再整備プロジェクトアンケート調査」や、「在り方検討ワークショップ」を丁寧に設計に活かすことで、「町民活動を核とする公共空間」を実現したいと考えています。そのために、松前町の歴史や文化資源を尊重しつつ、空間検討、意見反映、運営の3つを同時にデザインし、町の活性化と交流人口拡大を、皆様と共に目指します。



町民活動を核とする公共空間のため3つを同時にデザインする

「新しくなる義農公園に期待すること」の現提案での反映

以下の項目は、本提案すでに設計方針・運営案へ反映済みです。今後の町民参加の成果により、各項目の優先度や規模に強弱を付けて基本設計（空間計画）へ反映します。

プレイロット（遊具遊び場）設置 / 常緑樹を中心とした豊富な植栽 / 防災広場として緊急車両停車場・高台の確保 / 夜間照明の照度検討（シミュレーション）/ 日除けフォリーの複数設置 / 地域行事、季節催事、スポーツなど多目的に使える広場 / イベントの行えるマルシェ広場 / マルシェ広場の大屋根による文化・芸術の拠点化 / 義農神社との有機的連結

「義農公園の周辺にあると良い機能や連携」の今後の反映

空間設計と運営手法を併せて検討してまいります。

今後のワークショップや関係者協議を通じて優先順位と具体仕様を詰めていきます。

歴史資源と共に存する空間計画

義農公園は1957年に整備された義農神社と密接に関係しながら地域に親しまれてきた一方で、神社は公園に隣接しつつも孤立し、日常的な地域との連続性を十分に確立できていません。義農作兵衛の功績を踏まえると、神社はその精神を保ちながらも地域に開かれ、継続的に記憶される場であることが望まれます。

散策路と神社の参道との有機的連結

公園の既存散策路と神社の参道を、視線・動線の観点から連結し、歩行者が自然に移動できる導線を形成します。参道沿いや散策路沿道に「居場所」を点在させ、散策の途中で自然に神社と関わる機会を創出することで、神社を日常利用の文脈に組み込みます。

神社の空間性や精神性の継承

将来的に神社の個別維持が困難になった場合でも、義農作兵衛に関する精神や記憶が公的空間として継承されるよう、記念的回遊動線や回遊広場を整備します。参道や園路を基盤に広場を配置し、神社整備の有無にかかわらず一体的に親しみやすい空間を実現します。

歴史的・象徴的資源の保存と心理的な近さを両立させる環境整備

義農作兵衛の像や墓、頌徳碑、忠靈塔、松の大木など主要な歴史資源は現地に据え置き、周囲に滞在空間を設けることで、心理的・物理的に接近しやすい環境を整備します。歌碑等は景観との調和を考慮し、適切に移設・再配置して史跡群としてのまとまりを図ります。

町民アンケートを踏まえた義農神社の将来活用の手法の整理

義農神社の最適な整備手法を共に検討します。現時点では、義農神社の御社を残すどうかに関わらず、一体的な整備を行う際は、義農神社を都市公園に含めない方が課題が少ないと考えています。



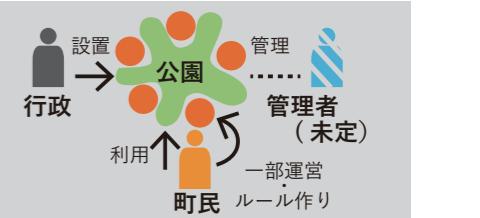
町民が主体的に公園運営の「プレイヤー」となる契機をつくる

「在り方検討ワークショップ」は、基本的に自治体の指針に従い町が主催して実施することを前提とします。私たちは段階に応じた模型作成やファンシーリテーション、運営支援を全面的に担います。

管理技術者は、設計実績である大阪府泉大津市シーパスパークにおける市民団体「シーパスパーククラブ」の組織化支援に加え、行政・設計者主催のワークショップでコメントーターを務め、市民が主体的に公園のビジョンの策定や運営の方針づくりに関与することを支援してきました。

奈良県三宅町交流まちづくりセンターにおいても、管理技術者も参加した町民ワークショップにより、町民・子どもたちが自ら運営委員会に参加できる仕組みを導入しており、これまでに4年目を迎えています。こうした半官半民の運営体制により、町内外の交流が活性化しています。

このような経験を踏まえ、義農公園でも松前町の町民一人ひとりが義農公園に思いを持ち、主体的に公園運営の「プレイヤー」となる契機を創出するために、5回目の「在り方検討ワークショップ」として、町民参加の「義農神社フィールドワークショップ」を、設計費の範囲内で行政と共に実施させていただきたいと考えております。



町民が公園のビジョン、ルールづくりや運営に関わる仕組みを支援します。



基本設計時のワークショップでは、「この場所が公園になったらどのように使えるか？」を住民の皆さんとともに考える時間を設けました。（シーパスパーク）

義農通り周辺の日常の賑わいと災害時の拠点機能を両立

徳島県「東部防災館おきのすインドアパーク」の設計から運営まで一貫して携わった経験により、日常の賑わい（まちづくり）と災害時の拠点機能（防災）を両立させる実践的知見を蓄積しています。これらの知見を町民・自治体・関係者の皆さんと共有し、義農通り周辺および義農公園全体の地域レジリエンス強化に役立てます。

カフェ等の役割：平常時の集客と非常時の支援

町民ワークショップで得られたアイデアや希望を踏まえ、公園中心部または義農通り沿いにカフェ等の民間飲食事業者を誘致します。平常時は来訪者の集客核・交流拠点として機能させ、災害時には炊き出し等の支援拠点として協力いただきます。誘致にあたっては、事業者との契約に災害時対応（炊き出し協力、備蓄の使用）を明文化し、平常運用と非常運用の両立が確実に行える体制を構築します。



おきのすインドアパークの開業準備を通じて培った飲食店誘致のノウハウを、まちづくりに積極的に展開してまいります。



防災の視点と広域的な視点を併せ持ち、義農通りエリア全体の活性化の仕組みを、町民の皆さんと共に育てていきます。

広域回遊動線と公園への避難経路の整備

広域的視点で松前駅前広場やシンボルロードと連携し、義農通りを含む回遊軸を整備します。公園周辺道路、園内散策路、義農神社の参道を動線で接続し、沿道には木陰やベンチ等の居場所を配置します。これらの広域的な回遊性の向上により、災害時には避難場所への経路が容易になり、近隣からの避難に適したルートを確保します。

